# 貴重書，アーカイブ資料から「スペシャルコレクション」へ

倉持（くらもち）　隆（たかし）
（三田メディアセンター）

## はじめに

2013年９月，三田メディアセンター貴重書室担当とアーカイブ担当が統合し，新たにスペシャルコレクション担当が誕生した。貴重書室担当は，長く重要文化財を含む和漢洋の貴重書，古文書など約１万７千点余を管理してきた。一方，アーカイブ担当は2012年７月に生まれた新しい担当である。図書の枠に収まらない写真や拓本などのコレクション資料や選書基準では貴重書には指定されない古文書，塾員の旧蔵資料，さらに図書館の歴史に関する資料といったアーカイブ資料を保管するために設けられたアーカイブ室開設に合わせて設置された[1)]。両担当はこれまで緊密に連携しながら，三田メディアセンターにおける貴重書，アーカイブ資料に関する業務を担ってきた。今回の統合はその連携をさらに深め，貴重書やアーカイブ資料を「スペシャルコレクション」として総合的に捉え，資料の価値を効果的に引き出しながら効率的な運営を行うために実施された。本稿では，新担当の概要を紹介するとともに，統合後１年を振り返えることとしたい。

## 1．スペシャルコレクション担当設置の目的

新担当設置の目的は，統合により変更された担当名と部署の位置づけに明確に表れている。まず，「名は体を表す」ということわざがあるとおり，今回の組織改編の目的は「スペシャルコレクション」という名称に凝縮されている。「特殊資料」や「特別資料」といった従来型の担当名も検討されたが，研究・教育活動における資料の積極的な活用や，さらに広く「社会貢献」も視野に入れた活動を目指す担当としてふさわしいと考えられたのが「スペシャルコレクション」であった。

担当名決定にあたり参考とされたのが，北米の研究図書館において現在大きな関心を集めている「スペシャルコレクション」の概念である。「スペシャルコレクション」とは「貴重書」・「マニュスクリプト（写本）」「アーカイブ（文書）」を包括したものとされ，この概念の特徴的な点は，それらの資料が所蔵する機関・組織が持つ使命（大学で言えば教育・研究）と密接に結びつき，組織をアピールする存在にもなりうると考えること，さらに，単に資料を大切に保管するだけでなく，積極的に授業などの教育活動に活用することを通じて大学の使命を果たしていこうとすることである。つまり，これまで日本の大学図書館では周辺的な存在とされてきた貴重書やアーカイブ資料を大学図書館の研究・教育支援業務の中心に据えようという考え方である[2)]。

その概念を念頭に，スペシャルコレクション担当は図書館業務の中で「パブリックサービス担当」に位置づけられた。従来，貴重書室担当は目録やデータ整備といった，図書館を技術的な側面から支える「テクニカルサービス担当」に属していたが，閲覧担当やレファレンス担当など，直接利用者と接する部署と同じ「パブリックサービス担当」に変更された。スペシャルコレクションを活かしたサービスを塾内外に向けて積極的に提供していく，つまり「アウトリーチ」していくことを意識したものである。

## 2．統合のメリット

続いて，統合によるメリットを考えてみたい。まず，貴重書やアーカイブ資料を一括して管理することが可能となったことがあげられる。これまで整理は貴重書室担当，管理はアーカイブ担当というような資料もあったが，それらをスペシャルコレクション担当が一括してスムーズに行えるようになった。一例をあげれば，統合以前から両担当で整理を進めてきた「桑名松平家文書」は，アーカイブ資料の公開第１号として，統合直後に一般公開された。公開後，研究者からの問い合わせも多く，実際に閲覧に来られた方も多い。閲覧環境のないアーカイブ室の資料を貴重書室で閲覧提供するという方法も確立し，閲覧希望者へ十分な対応をとることができた。統合により，今後も貴重書やアーカイブ資料全体を見ながら優先順位を決めて作業することが

可能であり，未整理資料の公開促進も期待できる。

従来の貴重書室３名（専任２名，非常勤嘱託１名）にアーカイブ担当１名（専任）が加わり，スペシャルコレクション担当としての人員が増えたことも大きい。レファレンス担当兼務の課長のもと，日常的な業務（資料利用，閲覧，複写，展示出品など）もより柔軟な対応ができるようになった。

書庫管理の一元化もメリットの一つであろう。スペシャルコレクション担当の管轄は主として貴重書庫，アーカイブ室，保存庫であるが，特に保存庫についてはアーカイブ資料以外にも図書館関係資料や雑誌類が配架され，複数の部署が関係することで全体の保管状況を確認しにくい状況であった。スペシャルコレクション担当発足後は，同担当がリーダーシップをとって関連部署の調整役となり，これらの閉架書庫を一元的に管理することが可能となった。

## 3．スペシャルコレクションの積極的な活用

ここでは，スペシャルコレクションを塾内外に向けて活用する，アウトリーチの事例を紹介するとともに今後の課題についても言及したい。

三田メディアセンターでは，今秋で26回目を迎える貴重書展示会（於，丸善ギャラリー）の他，大正期以来続く館内展示の長い歴史があり，展示はアウトリーチの大きな柱となっている。特に2011年10月に図書館１階に展示室が開室して以降は，ほぼ毎月企画展示を開催して，所蔵するコレクションを一般公開してきた。その他，塾外の博物館・美術館等の展覧会にも協力してきたが，新担当の１年を振り返るとき，統合のメリットを感じさせる大きな展示協力があった。神奈川近代文学館「生誕140年記念　泉鏡花展　― ものがたりの水脈 ―」（会期：2013年10月５日～11月24日）への協力である。所蔵する泉鏡花の遺品類と自筆原稿，初版本などを多数出品し，三田メディアセンターとしても協力体制をとった。これまで泉鏡花の遺品や自筆原稿は貴重書室担当，初版本を中心とした現代文学のコレクションである「三田文学ライブラリー」はアーカイブ担当といった形で管轄が分かれていたが，統合により一括して対応することができた。事前の調査や出品準備を円滑に行うことができたのは大きな成果であった。

一方，まだ十分に活用できていないと考えているのが，授業支援の分野におけるサービス提供である。三田メディアンターとしては，所蔵する資料を活用し，義塾の研究・教育に寄与していくことが一番の使命である。今後展示とともに重点的に実施していきたいのが，「貴重書活用授業」である。

現在でも国文学や英米文学，書誌学，日本史学，民族学，図書館・情報学などの分野では，授業で貴重書室での貴重書閲覧・解説をされる教員も多い。スペシャルコレクション担当では，今後このような形での資料の利用を促進したいと考えている。学部生や大学院生に，授業を通じて貴重書やアーカイブ資料を見る機会を持ってもらうため，まずは授業を担当する先生方に積極的なプロモーション活動を行っていく予定である。この「貴重書活用授業」の良いところは展示ケースのガラスを通さずに資料を見られる点である。例えば，「百万塔陀羅尼」や「源氏物語」など，教科書に登場するような資料を直接見ることができ，本物が持つ魅力を感じてもらうことができる。図書館の資料を通じて，慶應義塾で学んでよかったと感じてもらえたとしたら，大学図書館として何よりのアウトリーチといえるのではないだろうか。

## まとめ

以上のように新担当発足から１年を振り返り，その活動を紹介してきた。積極的な資料の活用，アウトリーチに力点を置く方向性を示したが，これは決して資料保存を疎かにするものではない。資料の保護は大前提であり，貴重書や世の中に１点しか存在しないアーカイブ資料を大切に保存し，後世に伝えていくことは，図書館として重要な責務である。スペシャルコレクション担当は今後も資料の保護に十分留意しながら，積極的に義塾の研究，教育のさまざまな活動に資料を提供していきたいと考えている。また，文化遺産である貴重書やユニークなコレクションを所蔵する大学図書館として，資料が持つ価値を広く社会に還元し，社会貢献していくこともまた大きな使命の一つである。塾内外への展示出品を通じて，広く一般の方々に本物の魅力を知っていただく機会についても継続的に提供していきたい。

### 参考文献

１）竹内美樹．「あの箱」を目覚めさせよう：三田メディアセンターアーカイブ室．MediaNet. 2012, No.19, p49.

２）風間茂彦．目から鱗が落ちた！「スペシャル・コレクション」．知識の花弁　三田メディアセンターだより．2013, No.2, p7.